

◆
ソファアの隣に座っている美佐子が、私の首に腕を回してきた。

私は彼女を抱き寄せ、そのワインで濡れた唇を味わう。顔を離すと、唇が開き、そこから舌先を覗かせる。私は伸ばした舌で、彼女のその舌先をくすぐる。

美佐子が、前のテーブルに置かれたワイングラスを手にとり、半分程残されたワインを私の口に含ませる。

再び私は彼女と唇を合し、ワインがお互いの口の中で芳香を醸し出す。それを十分に味わった後、彼女は私の首筋に舌を這わし始める。

昂ぶりはじめた息が吹きかかり、ワインの香りが鼻孔をくすぐる。

一瞬その動きが止った。

彼女が顔を上げ、私を見詰める。見返す私に、悪戯っぽい微笑みを返した後、再びその顔が私の首筋に埋っていった。

美佐子の舌の動きと、吹きかかる息の感触によって、私は下半身に力が集りはじめるのを意識する。

軽い痛みを首に感じる。

軽い驚きに顔を向けた私に、美佐子が視線を伏せたまま含み笑いし、低い芝居がかった声で囁く。

「貴方の血と精気を吸い取ってやるわ……」

美佐子の手が素早く私の下腹部に伸び、スボンのチャックを下ろす。下着の上から勃起しだしている剛直を握り、ゆっくりと握りながら摩りはじめる。

そんな彼女の手の動きの中で私は昂ぶっていく。

完全に勃起した時、彼女は下着の中に手を差し入れてきた。

美佐子が顔を上げ、私を見返す。その浮かべた微笑みに、私は彼女の欲望とは違った別の感情を見る。

「今日、他の女の人とデートしたでしょ？」

私は眉をひそめる。

今日私は美佐子に優香の事を話し、そしてある提案をするつもりだったのだ。そしてそのきっかけを探していた時の、美佐子のその言葉。私は驚きを禁じ得なかった。

美佐子が言葉を続ける。

「……もう一つ当ててみましょうか。その女の人って、この前の公園で私に話した会社の女の人でしょ。」

ふふ……隠してもダメ、香水が貴方の身体から匂うの、私と同じ香水の匂いが……」

美佐子は、話しながらも私の剛直を握る手の動きを止めようとはしない。

気を逸らされ、力を失いかける剛直に再び力が戻る。

「もう、したの?」

美佐子が、その自分の言葉を補足するように、手の中の私を一度強く握る。

「ああ、昨日ね」

答えた後、私は彼女の反応を見守る。

彼女は低く笑い声を上げていた。その笑いに、私は彼女の反応が想像どおりのものであった事を知る。

「男の人ってどうしようもないものね」

美佐子が私に妖艶な微笑みを向ける。だがその声は、今までよりも更に昂ぶりを濃くしていた。

「罰を与えて上げるわ……」

美佐子が、乱暴に私のカッターシャツのボタンを外し、身体から抜き取る。その後、彼女はそれを、同じく剥がすように脱がした私のスボンと一緒にして床に投げ捨てる。

私はそんな性急な彼女の行動に、強い彼女の欲情を見る。

美佐子が私のシャツをめくりあげ、裸の胸に舌をはわしてきた。時折歯が私の肌に突き立ち、けっして不快ではない軽い痛みが走る。

彼女に呼応するように、私の中で欲望が頭をもたげはじめる。

美佐子がテーブルの上のワインボトルを取りあげ、私の裸の胸の上で傾ける。残っていたワインが肌に振りかかり、血の色を真似た液体が、胸と腹、そしてソファアを濡らしていく。

再び私の胸に顔を押し付けた美佐子が、先程よりも深く歯を立てながら、そのワインを舐めつつて行く。

私の下腹部に彼女の頭が達する。下着の間から昂ぶりを突き立てている私の剛直に彼女は再びワインをふりかけ、深く啜えこんでくる。

赤い液体に濡れた唇と舌が、剛直の快感のポイントを激しく刺激する。私はその強すぎる快感に身を反りかえさせ、うめきながら彼女の顔を無理矢理に引き離す。

彼女が、そのワインで濡れた唇を舌で拭い、私に微笑んだ。

私はその彼女の貌に激しい昂ぶりを感じる。

美佐子を押さえつけるように、乱暴な手付きでソファァーにうつぶせに倒し、スカートをまくりあげる。

皺のよつた白い下着に包まれた尻の丸みが私の目を射る。

美佐子が、私の視線を意識しているようにゆっくりと脚を開きはじめ、その片膝がソファァの下に付く。

開かれた白い下着に包まれた彼女の股間は、その欲情を如実に示していた。

下着のその部分は滲ませたぬめりでべっとり張り付き、その奥に秘めた肉襞の形状を透かして見せている。

美佐子はその濡れた部分を、私に見せつけようと腰を持ち上げ、股間を更に開く。

辺りに漂うワインの匂いに、欲情した女の匂いが混ざり合った。

私は彼女の服の裾を掴み、首のあたりまでずり上げる。あらわになった白い背中を撫ぜ下ろし、そのままパンティを抜き取り、床に投げ捨てる。

私は、女の秘密の全てを剥き出しにしている彼女を、その背後から見下ろす。

まるで私の視線に反応するかのように、肉襞の狭間からじわりと濃く白濁したしたりが滲みだし、太股に垂れ下っていく。

「……ああ……」

美佐子が声を上げ、腰を淫らに蠢めかす。

私はそんな彼女の腰を掴み、そして揃えた二本の指を挿入する。その挿入があまりに急でしかも深くえぐった為、彼女が小さな苦痛の声を上げた。

私は指に、柔らかな肉壁のうねるような抵抗を感じ、それを楽しむ。

挿し入れた指をくねらせると、犯される肉穴がまるで独立した一匹の動物のようになり、強くその肉を絡み付かせてくる。

私はそんな反応に逆らうように、中に入れた指を押し広げ、彼女の内側をまさぐる。

美佐子が、挿入された指から快感を得ようともいうように尻を振り、腰を突き出してくる。

私は指を抜き、彼女のぬめりで汚れた手で、テーブルの上からワインボトルを掴み取る。

「これでやってみろよ」

彼女の目前に差し出したワインボトルの中で、わずかに残った赤い液体が揺れる。

美佐子がソファァーから身を起こし、欲情に濁った視線を私に、そしてボトルに向ける。

美佐子が捲れあがっている服を更にはだけ、揺れる乳房を片手で驚づかみにして揉みしだき、もう片方の手で私からボトルを取る。

彼女が呷るようにボトルを傾け、その唇の端から溢れ出したワインが、歪む乳房に赤いしたたりをこぼしていく。

彼女が大きく脚を開く。乳房を揉んでいた手が、滲んだぬめりをあらわにしている股間に伸び

る。

美佐子が私を見詰めながら、ゆっくりと二本の指で肉壁を開き、そしてその中心の肉穴に曲げた中指を挿し入れていく。

「ああ……」

食入るような私の視線を受け、視姦される悦びに美佐子が声を漏らす。

指は深く付根近くまで自分を犯し、そして中を抉り出すように蠢いた後、引き抜かれた。

ぬめりを纏ったその指を彼女は舐め、そしてまだわずかに中身を残したままのワインボトルを股間にあてがう。

濡れた柔らかな肉壁が、ボトルの固いガラスの口に絡みつく。

「……見て……」

彼女は昂ぶりによって掠れた声で囁き、そしてゆっくりとボトルを持った手を進めていく。

挿入とともに押し開かれる彼女の肉穴。固いガラスの瓶に犯されるそこは、深く挿入されていくにつれ淫らにそれを啜えこみ、そして内からの圧力によって、すぐ下の窄まりがゆっくりと盛り上がっていく。

「冷たいわ……」

奥に達するまで深く挿入した時、彼女が囁いた。

「でも……固い……とっても固いわ」

美佐子がゆっくりとボトルを前後に動かしはじめる。

ボトルの中でワインが踊る。

私は、そんな彼女の姿を見詰める。服をまくり上げ、赤い雫に濡れた乳房を剥き出しにしたままに、下着を着けていないスカートのみで下半身を大きくMの字型に開き、その股間の中心に自らワインボトルを挿入しながら、半開きとなった唇から、ワインの香りが漂う喜びの息を吐く彼女の姿を。

彼女の興奮によって膜のかかったような視線は、誘うかのように私に向けられている。

私はその視線を受け止め、自分の中の欲望が耐え切れないものにまで膨れ上がっていくのを待つ。

美佐子の片手が、再びブラジャーからこぼれている乳房に伸び、乳首を指で摘み上げた時、私は彼女の手からワインボトルを奪い取る。

ボトルは、その首の部分から十センチ程が淫らに濡れ光っていた。私はそんなボトルをテーブルに置き、ソファアーの上の美佐子を抱しめる。

美佐子が手を私の背中に回し、そして囁く。

「させて……私にさせて……」

美佐子に促され、私は彼女と身体を入替える。座った私の股間を跨ぐように彼女は大きく広げ

た膝をソファに付き、股間の中心のすぐ下で突き立っている剛直をその手に掴む。

美佐子の手が、私の昂ぶりを確かめるように剛直を擦り上げる。その固さと熱さ、そして先端から滲みだす透明な粘液が手に粘りつく都度に、彼女の瞳は欲情の色合を深め、息が荒く深くなつていく。

「固いわ……固くて熱いの……」

そう囁く彼女の唇の端には薄く光る涎の筋があり、そしてその顔が浮べる表情は昂ぶりきつた女のものであった。

だが彼女はそれでも自分を焦らし、手の中に包みこむように握った私の剛直を撫ぜ回しつづける。

先端から滲みだした粘液が潤滑剤となり、美佐子の手の中の剛直がぬめる。その強い快感に私は勃起を強め、そして喘ぐ。

たまたら私が引き寄せようとした時、彼女が言った。

「ダメ……、貴方は動いちゃだめ……。まだダメなの……」

美佐子の手がいつそう激しく私の剛直を愛撫しだし、その指先は先端の窪みを擦りはじめる。

「うっ……」

鋭角的な快感が走り、剛直がビクリと震える。

「あぁっ、垂れて来たわ……」

美佐子が、私の先端からしたり落ちてきた粘液を見詰め、そしてその顔が近づいて来る。したりにぬめった剛直の表面を美佐子の舌がはい昇っていく。

舌先に乗ったぬめりを味わいながら、彼女はもう片方の手を自分の股間に伸ばし、その指で肉褸を開く。

剥き出しになった肉褸の奥の粘膜。そしてその上端では彼女の昂ぶりを如実に示すように肉の芽が突き立っている。

ぬめりにまみれた女肉とその奥の肉穴。求めるそこを食入るように見詰める私を、そして自分を焦らし、彼女の指先が肉の芽の包皮を剥き下ろす。

彼女の指が、その瑪瑙色の突起を押し潰すように愛撫しはじめる。

「あぁ！」

彼女の快樂に歪んだ顔と、喘ぎの声、そして熱い息を浴びた瞬間、私は限界を超える。

剛直を摩り続ける彼女の手を掴み、引き離し、そして彼女を引寄せた。

「あっ！ だめっ」

一瞬後、美佐子の身体は私の手の中にあり、私達は至近の距離で見詰め合う。

「お願い……私にさせて……」

美佐子が潤んだ瞳を私に向けて囁き、そして再び剛直を捉えた手が、その先端を自分の肉褸の

中心にあてがった。

美佐子が私に視線を当てたまま、ゆっくりと腰を落していく。

「……ああ……うう……!」

挿入の快楽に歪む美奈子の顔。彼女はその感触に悦びの声を上げ、私もまた、徐々に剛直を包みこんでいく女肉の味わいにうめきを漏らす。

完全に彼女の股間と私の股間が重なった時、私達はお互いを強く抱しめ、そして暫し間、身体のなかに湧きあがっていく快感を確かめ合う。

至近にある快楽を待ちきれず、先に動きだしたのは彼女の方だった。

美佐子は大きく開いた股間の中心を私の下腹部に押し付け、そして自分の秘部を私の付根に擦りつけるように腰を動かしはじめる。

「おお……イイ!……イイわ……!」

もつと強い快楽を求める彼女が激しく腰を上下に振りだすと、彼女と私の接点から淫らな音が漏れはじめる。

私は彼女の身体からぶら下がっているブラジャーを取り、抱き寄せる。乳房が私の胸で押し潰され、身体が深く重なり合う。

私は再びワインボトルをとり、二人の胸が密着する狭間に向けて傾ける。

零れだしたワインは私達の身体を赤く濡らし、その最後の朱色の一滴は、細い糸を引きながら二人の狭間に向かってしたり落ちていった。

美佐子の喘ぎと動きが激しくなり、そして二人の昂ぶりの体温によって温まったワインからは、芳香が漂いはじめる。

私は大きく上下に動く美佐子の尻に両手をかけ、その柔らかな肉を掴み、押し開くようにして引き寄せる。

いっそう深くなった挿入に、彼女の腰の動きに粘り付くかのような調子が加わり、絶頂が間近い事を知らせる声が、彼女の唇から喘ぎの息とともに発せられる。

私は腰を躍らせ、ソファアのクッションを利用して剛直を彼女の中に激しく突き入れる。

「あああ!!」

激しくなった私の動きと、それによってもたらされたいっそう強い快楽に、彼女の身体が反り返り、私の背中を抱しめる手が肌に爪を立てる。

ソファアのスプリングがリズムミカル軋みの音を上げはじめる。その音が次第に早いテンポとなって、彼女の上げる快楽の声と重なり合いながら部屋の中に満ちていく。

「!」

「!」

二人が上げた絶頂の声とともに美佐子が大きく身をよじり、絶頂に達した瞬間、私もまた。ピ―

クを迎える。

「うう！ あっ！ あっ！」

私が絶頂とともに発した熱い迸りが彼女の股間の最深部に降りかかる度に、彼女は短く切れ切れの声を上げながら身体を振るわせる。

互いの究極の一瞬が過ぎた後、美佐子は腕と脚で再び私を強く抱しめ、そして乱れた息を私の耳に吹き掛けてきた。

「ステキだったわ……」

私は、ゆっくりとほぐれていく快樂の余韻の中で彼女と唇を合せ、そして、二人の身体の狭間に注ぎこんだワインの立てる豊かな芳香を強く意識していた。



優香は湯上りの火照った身体を。パジャマに包み、ベッドに腰を下ろす。

眠ってしまうにはまだ早すぎる時間だった。テレビガイドにざっと目を通すが、そこには興味を引かれるような番組はなく、音楽でも聴こうかと、小さな本棚の横に詰められたCDコレクションに彼女は手を伸ばす。

その場その場で気に入ったものを衝動買いしてしまう為に、彼女の所有するCDは雑多なものだったが、今の気分には何故か、愛や恋をテーマしたものはそぐわないように思えた。

結局彼女は、クラシック音楽をシンセサイザーでアレンジした一枚のアルバムを選びだす。

部屋に置かれた一昔前に流行ったようなミニコンポにCDをのせると、部屋に彼女が歴史の中でしか知らない時代の作曲家が創りだした音楽がゆっくりと流れはじめた。

優香はベッドの上に膝を抱えて座り、音楽に耳を傾けながら、考えに耽る。この作曲家は自分の死後、彼の時代にはそんな事が可能である事すら想像されなかっただろう方法で作りに出される「音」で、自分の曲がアレンジされる事を知ったらどう思うだろうか。

優香の思索は、音楽をBGMにして様々な方向に進んでいく。だが、やはりその中心には昨日の、男の部屋での事があった。ベッドで抱かれた事、そしてその後のバスルームでの交わり。そしてその時に感じた快感……。一人で自分の部屋にいる今、思い返すと頬が火照るようであった。

優香はわずかこの二日間の内の、自分の心と身体の変化を実感していた。暗い絶望感がいつも暗雲のようにたちこめていた心は今、爽快に晴れわたっていたし、何より彼女は自分の決断によってその「暗雲」を消し去ったのだ、自分が誇らしく思えた。

そして身体。

先程、入浴中に洗おうと何気なく触れた股間の部分、そしてその時感じた、溜め息を吐きたくなるような瞬間的な快感と、その後の、まるで水面に投げた石が創り出す波紋のように全身に広がっていった衝動。

感じやすくなっている……。

それは決して嫌なものではなかったが、同時にどこかそら恐ろしさを感ぜさせるものでもあった。

いつしか優香の太股は、知らず知らずの内に寄合わされていた。そしてその頂点の部分から鈍い快感と衝動が生じる。今までにも何度か感じた事のあるその衝動は、いつものものよりも深く、彼女の身体に浸透して行く。

それは彼女にとって、抵抗するにはあまりに強すぎる誘惑だった。

(お風呂で洗ったのに、また汚してしまうわ……)

そんな思いは、肉体からの誘惑に身をまかせ直前の、心の、肉体に対する最後の抵抗だった。優香が唇を舐める。ブラジャーを着けていない胸の鼓動が心持ち早まっている。

窓に目をやり、カーテンが閉じられているのを確認する。覗かれると心配はまったくと言ってもよいほどなかったが、やはり気になった。

パジャマの胸のボタンを外すと、二つの乳房が電灯の光の中に晒される。その頂点の薄く色付いた乳首は、既にその形をはつきりとさせはじめている。

片手が乳房に触れる。手のひらに感じる熱さは既に、湯上りの火照りの為だけではなかった。乳首を親指と人差指で軽く摘まみ上げると、胸から股間に向かって快感が走り抜けていった。

優香はまるでその快感の全てを、自分の内側に取り入れようというかのように目を閉じる。もう片方の手が反対側の乳首を摘まみ上げ、彼女は両方の乳首を弄りながらベッドにその身体を横たえる。

舌が唇を無意識に舐め回す。片方の手がパジャマのズボンの中に差しこまれ、指が下着の中に潜りこんでいく。

指先が、陰毛の中で息衝く小さな尖りに触れると、その瞬間、彼女の身体がピクンと震えた。

更にその下に指を伸ばす。内側の二枚の肉襞が、驚く程のしたたりで熱く濡れていた。

優香は手をパジャマから抜き出し、電灯の光にかざす。その瞳がまるで不思議なものでも見るように、親指と中指の間で糸を引く透明なしたたりを見つめる。

(こんなに濡れている……)

優香は昨日、男の部屋のバスルームで、彼に後ろから秘部を舐められた時の事を思い返す。あの時もこれ程に濡らしていたならば、彼は自分のしたたりを味わったのだと言う事に初めて気がつく。

強く、異様な程の昂ぶりが優香を襲う。そしてその昂ぶりは彼女をいつそう大胆にしていく。

彼女は。パジャマのスポンと下着とを一緒に脱ぎ捨て、その裸の下半身を、ベッドの端に、両足首がとどく程に大きく割り広げる。

手を、その開き切った股の狭間に持つて行き、ぽつりと尖った肉の芽を押し潰すように指を当て、こね回す。

鈍い痛みが伴ったその快感に、彼女の身体がベッドの上で大きく反り返り、思わず漏らした声を押し殺す唇に、白い歯が食いこんだ。

膣から溢れ出したあたりがその下の窄まりにまで垂れ落ち、そこを濡らしていくのを感じる。彼女は乳首をいじっていた手を股間に伸ばし、もう一方の手で肉の芽を刺激しながら、膣の周辺に円を描くように触れはじめる。指に、滲んだぬめりによって張り付いた陰毛のざらつきが感じられた。

中指を第二関節当りまで挿入する。内部は周辺よりも快感は薄い、指を内側に曲げてまさぐると、すぐに強い快樂が生じる場所が見つかった。

優香は両方の手を股間で動かしながら、快樂を味わい、そしてその脳裏に、昨日の彼の部屋のバスルームで背後から挿入された時の情景を思い浮べる。指の動きが、その時の彼の動きを真似るようにくねりはじめる。

自分の尻にリズムカルに当る、彼の太股と下腹部、後ろから掴まれ強く揉まれた乳房の鈍い痛みと快感、摘まみ上げられた乳首、首筋にかかる荒い息。

その全てを思い浮べながら、彼女は昨日のセックスを追体験する。

昂ぶりが頂点に達しようとした時、彼女はその手を止める。このまま一気に昇り詰めてしまうのは惜しい気がした。もつと淫らに、自分を淫らに追い詰めてみたくなった。

彼女はベッドを抜け出し、化粧台の上に置かれた手鏡を取る。床にその鏡を置き、その真上に自分の濡れた股間がくるように脚を大きく開き、腰を落す。一瞬の間だけ手鏡が曇った。

開いた肉襞をさらに両手で押し広げる。鏡面に、自分では醜いとも思える内臓器官そのもののような、開き切った秘部の奥が映しだされる。

彼女は以前、自分の秘部を興味本意で見た事はあったが、その時よりもそれはいつそう淫らに、そして醜く見えた。尖りを見せる肉の芽と粘液にまみれた肉襞、小さく開く尿道と内部の作りまです覗かせる肉穴。

（昨日、あの人はこれを見て、そして舐めたんだ）

優香はマゾヒステックな快感を味わう。

手鏡の中の肉穴が、彼女の気持ちを代弁するように、新たなしたたりを滲ませる。

優香は鏡に写る自分の秘部を見詰めながら、肉穴に二本の指を挿入し、肉の芽を捻り上げる。

「あぁっ……！」

半開きとなった唇からは、指の出し入れの動きに合せるように熱い息が漏れ、開いた太股が小

刻みに痙攣する。

途中で止められていたピークはすぐにやって来た。今度は止めようとは思わなかった、いや、止める事は不可能だった。

彼女は、自分の指によって開かれた肉壁と、その奥の肉穴に食いこみ犯す指の動きを見詰めながら、自らが産み出した絶頂の大波に身をまかせ。

その瞬間、開かれていた太股が反射的に閉じ、指を締付ける。肉穴から絞り出されたぬめりが指をつたい落ち、手鏡にしたたたっていく。

身体が大きく震え、唇からは、無意識の甘い声と息が漏れる。瞳が固く閉じられ、長い一瞬が経過する。

暫し後、彼女はまだ覚め切らぬ快樂の中で、自分のしたたりで濡れそぼった手を見る。そこからは微かに石鹼の匂いと、そして雌の臭いがした。

そして彼女は、自分の身体を駆巡った快感の余韻の中で、マスターベーションとセックスとが自分に与えてくれる快感の差を、はっきりと意識していた。

優香の瞳から流れ落ちた涙が、頬に銀色の線を引いていく。

音楽が終り、CDがその動きを止めた。



カタ、カタ、カタ、カタ、カタ………。

光量を落した薄暗い自分の部屋の中で、美佐子がワードプロセッサのキーボードを叩きはじめる。ぼんやりとしたCRTの発する光が、彼女のまだワインの匂いの残る身体に反射する。ほとんど彼女の指は躊躇する事なく、その思考を文字に置換えて行く。

(いま、かれはわたしのからだにわいんのおいと) / (変換) /

今、彼は私の身体にワインの匂いと(期待)を残して帰っていったところだ。彼と私が、この部屋で楽しみを分かち合った回数はまだ覚えてはいないが、今日のセックスは、彼が初めてこの部屋に来て、私の(もう一つの所)を抱いた時以来の強い快感を私に与えてくれた。

入浴したにもかかわらず、今まだ私の身体にはワインの匂いが残っている。多分この香りは私の心に染付き、これからも消える事はないだろう。また私がセックスを連想してしまうものが一つ増えたと言う訳だ。

今夜、私が彼を挑発にかかった時、彼の身体から、私の付けているのと同じ香水の移り香が匂った。その時私はすぐに、彼が以前公園で私を抱いた時に語った、私と同じ香水を付けていると言う同僚の女性の事が頭に浮んだ。

私の問いかけに、彼はいつものように率直に答えてくれた。彼はあの女性を抱いたのだ。

私は確かに、その彼の答えに嫉妬を覚えた、だけど（怒り）は感じなかった。いや、そればかりか私は彼の言葉に欲情さえも感じたのだ。

そしてその後私は、その女性、いや、もつとはつきり書こう、（他の女）の肌が触れ、ひよつとしたら舌を這わせたのかもしれない彼の裸の胸に、私の印を刻印したいという気分にとらわれたのだ。

私は彼が持って来てくれたワインを、彼の胸にふりかけた。血の色をした液体が彼の胸にしたたるその光景に私は更に欲情し、その肌に歯を立てた。

彼もまた私と同様に興奮し、私の舌が彼の下腹部に達する頃には、たくましくそそり立てていた。私はそのペニスにもワインを振り掛け、彼が苦痛を感じるのを承知のうえで乱暴に刺激した。

痛みが彼を更に興奮させたのだろう、私は無理矢理に引き離され、そして私は彼の目に強い欲情を見た。だが私は更に彼を刺激しようと、口の回りに付いていた彼のペニスを濡らしていたワインを舐め取るところを見せつけた。

欲情した彼が、「ワインの瓶を挿入しろ」と私に命じ、私はその言葉に更に興奮を覚えた。

冷たいガラスが私の内部に潜りこんでいく感触には、さほどの快感はなかったが、私は私のその行為自体に刺激され、更に昂ぶっていった。

私は、その昂ぶりの中で、淫らにワインの瓶を咥えこんでいるだろう股間を彼に見てもらいたくなり、脚を大きく開き、腰を彼に向かって突き出していた。

彼の食こんでくるかのような視線。そして彼がそそり立てているものの先端が濡れて光っているのを見て、私は更に手の動きを大きく、淫らにしていた。

私の思惑通りに、充分に興奮した彼はその後、私が彼にしたようにワインをふりかけ私を抱いた。

もちろん私は、いつものように激しい絶頂を味わった。

そして昂ぶりと快樂が終った後……。

彼が私に、彼が抱いた会社の女性の事を話しだした。その話の内容に私は驚きを覚えた。

その女性は公園での彼と私のセックスを覗き見していたのだ、そして彼が私に（告白）した内

容を聞き、そして彼と寝た。

つまりその女性は、私が彼の精液を飲み、自分を割り開き、全てを彼に晒したその光景を見ていたのだ。

恥ずかしさと、そして奇妙な事に私はその時、再度内部の深いところでセックスへの（疼き）がくすぶりはじめるのを感じた。あの公園での「見られているかもしれない」といった感覚が生み出した、倒錯した快感。その所為かもしれない。

続いて彼の口から語られた、彼女の過去の悲しい体験に私はやり場のない悲しみと怒りを覚えた。

女性には強姦願望があると言う人がいる。しかしそれは私にとっては完全に嘘だ。セックスは確かに、男性にとっても女性にとっても、暴力的な側面をもっている事は否めない。相手を征服し、独占したいと言う存在的な欲求が性交という行為の根本にあるからなのだろうが、それはあくまでセックスの本質ではないと私は思う。セックスとは（私にとっては）楽しみであり、欲望の充足であり、快感の追求だ。つまり、全てプラスの方向なのだ、しかし強姦は完全にマイナス方向への行為だ。私は幸いにして、そのような経験はないが、もしそれが私の身に訪れたならば、私は使い捨てにされたテッシュペーパーのように自分を感じ、消耗してしまう事だろう。

そして彼は私に提案した。彼女に合ってくれないかと、そして自分と共に彼女を抱いてくれないかと。

その彼の言葉を聞いた時、私の中で様々な思惑が渦巻いた。

彼女が過去に強姦され、その為に歪んだ性癖を持ち、私達のセックスを覗き見した事、彼女が彼を誘った時には私の存在を知っていたのだと言う事、彼が彼女を抱いた事。

だが、そのどの思惑よりも私に決心をさせたのは、彼女を彼とともに（抱く）と言う事が、私にとって刺激的で興味を引く（行為）であった為だった。

私は彼に承知の返事をした。

（そしてかれはわたしのからだにわいんのおいと）——（変換）——

そして彼は私の身体にワインの匂いと（期待）を残して帰っていった。

美佐子がワードプロセッサのスイッチを切る。

身体がその（期待）に熱くなり、ワインの残り香がまた心持ち強くなった。

以下、次回へ